

若い女性たちの多くが非正規で働き、さまざまな事情で働けない女性たちも多いが、その困難はなかなか見えてこない。「単身女性3割強が貧困」という昨年暮れの朝日新聞の「孤族」の記事が反響を呼んでいる。

横浜市の男女共同参画センターの指定管理者である横浜市男女共同参画推進協会は、2008年から「働きづらさに悩む若い女性の自立支援」を先駆的に取り組んでいる。昨年暮れに、この就労講座の卒業生を取材した記事が朝日新聞に掲載された。連載「孤族の国」の第4部、「女たち」の第1回だった。この記事には数十通の共感の声が寄せられ

た。そこで、リアルな場ですうした声を聴き合おうと、1月23日、「孤族」を越えて、ガールズトーク@横浜」が開催された。ガールズ就労講座からめぐるカフェへ



ガールズ就労講座修了生がスタッフとしては働いているめくカフェは落ち着いた雰囲気人でなごませる

08年、同協会は15歳から35歳までの学校や職場に属していないシングル女性を対象に調査を実施。調査から、対人関係が苦手な働

生きづらさを抱えるガールズ。

「孤族」記事で大きな反響 「単身女性3割強が貧困」記事に共感



報告する高橋記者

たり辞めたりを繰り返していること、結婚や将来がみえない、統計上は家事手伝いとされているということが分かってきた。

そこでこうした20代、30代の女性たち向けに「ガールズパソコン+しごと準備講座」を09年から始めた。担当の小園弥生さんは「ビジネスパソコン講座は携帯メール世代には役立つ。受講者は安心な場と感じた」と話している。側面援助として「よこはま若者サポートステーション」と連携、化粧品会社が実施したメイク講座も好評だった。

修了後、仕事に就いた女性もいるが、一歩ずつの社会参加ができる場が必要だと、男女共同参画センター横浜南に「ガールズ就労体験めくカフェ」を10年にオープンした。スープとマフィンのお店は今、地域に定

着してきた。

ガールズと一緒に働いてきたカフェコーディネーターの丸橋克美さんは「スタッフの笑顔が増えたら、お客様と決まりきった言葉のやりとりが、どんな自分の言葉で説明したりしていくのを見ると、励まされる」という。

「仕事もなく伴侶もなく」に批判も

このめくカフェを取材した朝日新聞の記事は、大きな反響を呼んだ。高橋美佐子さん(記者)は「働きづらさは個人の問題ではないかと思ってきたが取材して社会の問題であると思つた」という。40歳の白治林非正規職員や、大学卒業前にかつたを壊し、アルバイトもできていないという女性、29歳でバイトと家事手伝いをしている女性などから「自分と同じ悩みを持つ人がいた」という手紙があったと紹介した。自己責任論的な反応は1人だけだったという。

高橋さんは「働きながら子育てしようという社会のムードの中で、こんな女性たちがいることに愕然

とした」と話した。

会場の参加者からは、「収入も伴侶もなく」という見出しにショックだった」という意見があり、高橋さんは「この見出しをつけてきたのは別の部署。収入もない、伴侶もないというところで追い詰められていく、女性の気持ちを出していきたくと思った」と経緯を話した。一方で「新聞記者がこういうものをとりあげるんだ、と感動した」という意見もあった。

「女性センターには子育て支援はいっぱいあるが、こんな講座もほしい」という意見や、「新卒でこけたらもうはい上がれない。マニュアルが多すぎてふり回される」というさらに若い女性の発言もあった。

2部の交流会では、さいたまの男女共同参画センターでもガールズ講座を開設し好評だったが、次年度には助成金が継続しないという発言もあった。震災により、困難を抱える女性たちへの関心が薄くなってきているが、状況の深刻さは増している。